

寺田寅彦全集

第二卷

寺田寅彦全集 第2巻 (全17巻)

1960年11月7日 第1刷発行 ©
1976年9月27日 第5刷発行

¥ 700

著 者 寺 田 寅 彦

発行者 岩 波 雄 二 郎

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発行所 株式会社 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・精興社 製本・三水舎

落丁本・乱丁本はお取替いたします

隨
筆
二

目次

科学上の骨董趣味と温故知新	七
病中記	一一
病院の夜明けの物音	一七
病室の花	二一
電車と風呂	三〇
丸善と三越	三七
自画像	五七
小さな出来事	八一
鸚鵡のイズム	一〇二

帝展を見ざるの記	一〇六
浅草紙	一一七
芝刈り	一二三
球根	一三七
春寒	一四七
文学の中の科学的要素	一五三
凍雨と雨水	一六一
漫画と科学	一六四
旅日記から(明治四十二年)	一七〇
厄年と etc.	二〇四
春六題	二一八
簞虫と蜘蛛	二二七

蜂が団子をこしらえる話	二三三
田園雑感	二三八
注解	二四九
後記	二五三

科学上の骨董趣味と温故知新

骨董趣味とは主として古美術品の翫賞かんしょうに関して現われる一種の不純な趣味であつて、純粹な芸術的の趣味とはおのずから區別さるべきものである。古画や器物などに「時」の手が加わつて一種の「味」が生じる。あるいは時代のにおいというようなものが生じる。またその品物の製作者やその時代に関する歴史的連想も加わる。あるいは昔の所蔵者が有名な人であつた場合にはその人に関する連想が骨董的の価値を高める事もある。あるいはまた単にその物が古いために現今稀有けうである、類品が少ないという考えに伴なう愛着の念が主要な点になる事もある。この趣味に付帯して生ずる

不純な趣味としては、かような珍品をどこからか掘り出して来て人に誇るといふ傾向も見受けられる。この点において骨董趣味はまたいわゆる収集趣味と共有な点がある。マツチのはり紙や切手を集めあるいはポタンを集め、達磨だるまを集め、はなはだしきはみかんの皮を収集するがごとき、これらは必ずしも時代の新旧とは関係はないが珍しいものを集めて自ら楽しみ人に誇るといふ点やはり骨董趣味と共通である。

科学者の修得し研究する知識はその本質上別にそれが新しく発見されたか古くから知られているかによつて価値を定むべきものではない。科学上の真理は常に新鮮なるべきもので骨董趣味とは没交渉であるべきように見える。しかし實際は科学上にも一種の骨董趣味は常に存在し常に流行しているのである。

もし科学上の事実や方則は人間未生以前から存していて、ただ科学者のこれを発見し掘り出すのを待って

いるに過ぎぬと考える者の立場から見ればこれくらい古い物はない道理である。こういう意味からすれば科学者の探求的欲望は骨董狂の掘り出し欲と類する点があると言われうる。しかしまた他の半面の考え方によれば科学者の知識は「物自身」の知識ではなくて科学者の頭脳から編み上げた製作物とも言われる。そう考えば科学者の欲求は芸術家の創作的欲望と軌を一にするわけである。しかしこういう根本問題は別としてもまだ種々な科学的骨董趣味が存在するのである。

一口に科学者とはいうものの、科学者の中には種々の階級がある。科学の区別は別問題として、その人々の科学というものに対する見解やまたこれを修得する目的においても十人十色と言ってよいくらいに多種多様である。実際そのためにおのおの自己の立場から見た科学以外に科学はないと考えるために種々の誤解が生じる場合もある。これらの種類を列挙するのは本文

の範囲以外になるから、これは他日に譲るとして、ここにはもっぱら骨董趣味という点から見て二つの極端に位する二種の科学者を対照してみようと思う。

科学者の中にはその専修学科の発達の歴史に特別の興味を持っている人が多数にある。これが一歩進むとその歴史に関したあらゆる記録古文書古器物に対してちょうど骨董家が持つような愛好の念をもってこれを収集する人もある。これはまず純粹な骨董趣味と名づけ得られるものであろう。また少し種類が違っているが、品物を集めるのではなくて古い書物や論文を愛読してその中からその価値のいかによらず人のあまり知らぬ研究や事実を掘り出して自ら楽しみまた人に示すを喜ぶ趣味もある。これは多くの読書家に通有な事であるがこれも一種の骨董趣味と名づけ得られない事はない。科学の方面で言えばたとえばある方則または事実の発見前幾年にだれがすでにこれに類似の事を述

べているといったような事を探索して楽しむのである。

次にもう少し類を異にした骨董趣味がある。いったい科学者が自己の研究を発表するに当たってその当面の問題に連関した先人の研究を引用し批評するのは当然の務めである事は申すまでもない。しかしこれが往々にして骨董的傾向を帯びる事がある。すなわち当面の問題に多少の關係さえあればこれがいかに目下の研究に縁が遠くまたいかに古くまた無価値ないしは全然間違つたものでも無差別無批評に列挙するといふふうの傾向を生じる事もある。この傾向はたとえばドイツの物理学者などの中にしばしば見受けるところである。別にとがむべき事でもないと思うがとにかく骨董趣味に類した一種の「趣味」と見てもさしつかえはなからう。

これと正反対の極端にある科学者もある。その種類の人には歴史という事は全く無意味である。古い研究

などはどうでもよい。最新の知識すなわち真である。

これに達した径路は問うところではないのである。實際科学上の知識を絶対的または究極的なものと信じる立場から見ればこれも当然な事であろう。また応用という点から考えてもそれで充分らしく思われるのである。しかしこの傾向が極端になると、古いものは何物でも無価値と考え、新しきものは無差別に尊重するよ
うな傾向を生じやすいのである。

これほど極端でないまでも實際科学者としては日進月歩の新知识を修得するだけでもかなり忙しいので歴史的の詮索せんさくまでに手の届かぬのは普通の事である。

しかし自分の見るところでは、科学上の骨董趣味はそれほど軽視すべきものではない。この世に全く新しき何物も存在せぬという古人の言葉は科学に対して必ずしも無意義ではない。科学上の新知识新事実新学説といえども突然天外から落下するようなものではな

い。よくよく詮議すればどこかにその因つてきたるべき因縁系統がある。たとえば現代の分子説や開闢説でも古い形而上学者の頭の中に彷徨していた幻像に脈絡を通じている。ガス分子論の分子はルクレチウスの夢みたところである。ニュートンの微粒子説は倒れたがこれに代わるべき微粒子輻射は近代に生まれ出た。破天荒と考えられる素量説のごときも二十世紀の特産物ではないようである。エピナスの古い考えはケルビン、タムソンの原子説を産んだ。デカルトの荒唐な仮説は渦動分子説の因をなしているとも見られる。植物学者ブラウンの物好きな研究はいったん世に忘れられたが近年に至って分子説の有力な証拠として再び花が咲いたのである。實用方面でも幾多の類例がある。ガリレ一の空気寒暖計は發明後まもなく捨てられたが、今日の標準はまた昔のガス寒暖計に逆もどりした。シーメンスが提出した白金抵抗寒暖計はいったん放棄されて

二十年後にカレンダー、グリフィスの手によって復活した。このような類例を捜せばまだいくらでもあるだろう。新しい芸術的革命運動の影にはかえって古い芸術の復活が随伴するように、新しい科学が昔の研究に暗示を得る場合ははなはだ多いようである。これに反して新しい方面のみの追究はかえって陳腐を意味するようなパラドックスもないではない。かくのごとくにして科学の進歩は往々にして遅滞する、そしてこれに新しき衝動を与えるものは往々にして古き考えの余燼から産まれ出るのである。

現今大戦の影響であらゆる科学は応用の方面に徴発されている。應用方面の刺激で科学の進歩する事は日常の事であるからこのために科学が各方面に進歩する事は疑いを容れない。これはまことに喜ぶべき事である。しかしその半面の随伴現象としていわゆる骨董趣味を邪道視し極端に排斥しつつには功利を度外視した

純知識欲に基づく科学的研究を軽んずるような事がある。それはならぬと思う。直接の応用は眼前の知識の範囲をいずる事はできない。従ってこれには一定の限界がある。予想外の応用が意外な暇人的学究の骨董的探求から産出する事は珍しくない。自分は繰り返して言いたい。新しい事はやがて古い事である。古い事はやがて新しい事である。

温故知新という事は科学上にも意義ある言葉である。また現代世界の科学界に対する一服の緩和剤としてこれをすすめるのもあながち無用のわざではないのである。
(大正八年一月、理学界)

病中記

大正八年十二月五日 晴れ 金曜

二三日前から風ごこちであったが、前日は午前氣象と物理の講義があったから出勤した。午過ぎから帰るつもりでいたが案外気分がいいし天気もいいから白木屋の俳画展覧会を見に行ったらもうすんでいた。それから丸善へ行って二冊ばかり教室へ届けさせるようにした。胃のぐあいあまりよくなかったが気分がいいので乗合自動車で銀座へ行った、そして例のように風月へは行ってコーヒを飲んだ。胃がよくないと思つて一杯でよしたのであった。五日の朝は風邪もよくなつたようだし胃もいいような気がした。しかし朝は

授業がないからゆっくりして日のよく当たった居間の障子の内で炬燵こたつにあたりながら何かしていた。十時半ごろに学校へ行ったら「数物」の校正が来ていたからすぐに訂正して木下君きのしたの部屋へやへ持って行った。自分の室へ帰って先日国民美術協会で行った講演「雲の話」の筆記を校正していた。一二ページ見ているうちに急に全身が熱くなって来た。蒸し風呂むろにでもはいったようで室内の空気がたまらなくおしつけるように思われた。すぐに立って左側の窓をあけたが風を引きかえしてはいけないと思つてすぐにまた締め切つた。上着を脱いで右側の机の上に投げ出し机の前に帰つたが同時に名状のできない胸苦しさを覚えた。横臥おうがしたいと思つたが寝る所がないから机の上に突つ伏して右に左に頭をもたせてみたが胸苦しさは増すばかりで全身は汗ばんで来た。室の向こうのすみに毛布があるのを思い出して席を立ててそれを取りに行った。毛布に手をか

けた瞬間に眼界が急にまっ暗になつてからだが左右にゆらぐを覚えた。なんとも知らずしまったという気がした。次の瞬間には自分の席の背後の扉とらの前に倒れていた。どうしてここまで来たかは全く覚えていない。なんとも言えぬ苦悶くもんが全身をおさえつけて冷たい汗が額から流れた。その苦しみを少しでも軽くする唯一の方法として大きなうめき声を出しつづけた。二三日前靴くつを修繕にやつたので古いゴツゴツの靴をはいっていたがそれが邪魔でたまらない。足をもたえるたびにそれがゴツゴツ戸棚とだなや扉に当たる堅い冷たい不愉快な感覚が非常に誇張されて苦しみを助けた。室の入り口の壁に立っているスチームヒーターの上に当たる白壁が黒くすすけているのが特に目立って不愉快であった。妙な事にはこのきたない床の上に打ち倒れてうめいている自分とは別にまた自分があって倒れている自分を冷ややかに傍観しているような気がした事であった。

助手の浅利君は部屋へやにいなかった、出勤している事は帽子掛けの帽子と外套がいのうでわかっているが朝から顔を見なかった。平日でも自分の室の前はめったに人の通らない所である。呼び鈴を押しに立つ事は到底できないから浅利君が帰るまで待っているほかにはどうする事もできないのであった。ガランとした室の天井を見るのが心細かった。ふるえる手で当てもなく手掛かりのない扉とびらの面をなで回しながら動物のようななり声をつづけていた。何分ぐらいこの状態が続いたかわからないが自分には恐ろしく長いものに思われた。そのうちに軽い足音が廊下に聞こえて浅利君がはいって来たので急いで呼びかけた。入り口から自分の寝ている所は見えないから返事はしたが自分がどこにいるかわからなかったようであった。二声三声呼んでいるうちに自分の倒れているのを見つけて急いでやって来た。驚いて寄って来た。机の上に胃活いかつの罐かんがあるから取っ

てくれと頼んだらすぐに取って来て飲ませようとした。しかし水がなくては飲めないからどうか水を一杯くれと言った。浅利君はすぐに小使室へ茶わんを取りに行った。それを待っているうちに急に吐きけが込み上げて来たので右向きに頭を傾けて吐いた。吐こうと思う瞬間に吐くものが黒い血だなどという予感が頭にひらめいた。吐いて見たら黒い血が泥どろだらけの床の上に直径十センチくらいの円形を染めた。引き続き吐いたのはやや赤い中になんだか白いものの交じたので、前のかたわらに不規則な形をして二倍くらいの面積を染めた。浅利君が水を持って来たから医者を呼んでくれと頼んだ。吐いてしまったら胸苦しさはなくなったが急に力が抜けたような気がしてそのまま動かずに天井を見ていた。脈搏みやくはくを取ってみたがたしかであった。なんだか早く宅うちへ帰って寝たいと思った。宅へ電話をかけてもらおうかと思ったがまあせく事はないと思っ

たりした。

そのうちに見知らぬ医者が来た。(あとで聞いたら学生監の医者だそう。)脈を取ったり血を検査したりしたが、別に何も言わないから、自分で胃潰瘍だという事を話して吐血前の容体を言おうとしたが声を出す力がなくて、その上に口が粘ってハッキリ言う事ができなかった。木下君も来た、金子さんや真鍋さんも来てくれた。杉浦さんが学校の毛布を持って来てくれてその上へねかされた。そのうちにあんがやって来た。あんの顔には驚きと落ち着きとがいっしょになっているように見えた。この教室の壁の中に妻の姿を見いだした感じはよほど妙なものであった。二十年来切り離されていた教室と家庭という二つの別な世界が急に入り交じったような気がした。妻が枕もとへ寄って来た時にはなんだかはりつめていた心が弱くなるような気がして涙が出そうになった。同時に自分は「そこに血

がある、血がある」といって新聞紙でおおった血痕を指さして言った、自分の声が恐ろしく邪慳に自分の耳に響いた。真鍋さんはしきりに例の口調でさしずして湯たんぽを取りよせたり氷袋をよこさせたりした、そして助手を一人よこしてつけてくれた。白い着物をつけた助手は自分の足のほうに椅子へ腰をかけて黙ってわきを向いていたが断えずこちらに注意していた。看護婦も一人来て頭のほうに黙って控えていた。田丸先生が時々はいって来て黙って様子を見て行かれた。先生の顔が非常にやさしくなつかしく思われた。藤沢先生もソットはいって来られたから挨拶しようとするのを手で押えるまねをして足もとの椅子に腰をかけておられた。

床の上に寝て仰ぎ見るすべての人の顔が非常に高い所にあるように思われた。そしてすべての人の好意と同情が自身の上に注がれるような気がした。落寞たる